

## 教員からみた大学生の不登校リスク要因の同定

荒井佐和子・石田 弓・大塚泰正・尾形明子・岡本祐子・兒玉憲一

Identification of risk factors for school-nonattendance from university faculty

Sawako Arai, Yumi Ishida, Yasumasa Otsuka, Akiko Ogata, Yuko Okamoto, and Kenichi Kodama

専門的なトレーニングを受けていない大学教員が学生の不登校問題を早期に把握するために有用なアセスメント方法を開発するため、教員からみた大学生の不登校リスクを測定するための項目の作成を行った。項目は先行研究および現職の教職員等の意見をもとに作成し、大学教員を対象に調査を行った。その結果、教員からみた大学生の不登校リスク要因として「他者との関係」「学業成績および授業態度」「本人の見た目」「経済的問題」の4因子19項目が抽出された。今後は今回得られた項目を用いた不登校リスクの評価方法の検討を行う必要がある。

キーワード：大学生の不登校，アセスメント

### 問題と目的

#### 大学生の不登校問題

「大学生の不登校」の問題は、小柳・森田（1994）によって提示された問題であり、出席すべき講義がある日に大学に登校しない、あるいはそれが連続するという状態を指す（蔵本，2011）。昔から講義に出なくとも試験の時だけ登校し単位を取得し卒業していく大学生の存在は知られていたが（野本・玉井・井戸・上西・川尻・安井・萩森・栗林・岡本・田中，2012），昨今の不登校学生はひきこもりの強いタイプが多く（渡辺，2010），従来の大学における，学生の自主性や自律性を尊重する関わりではもはや立ち行かなくなっている（野本他，2012）。不登校学生の実態調査に関する報告では，大学生の約1%に不登校問題が見られることが報告されており（小柳・森田，1994；安保・吉武・菊池，2001；鶴田・小川・杉村・山口・赤堀・船津・鈴木，2002），また，不登校日数が多いほど取得単位数が少なく，留年のリスクが高まることも実証されている（蔵本，2011）。さらに，単位不足から大学退学に至る者が退学学生の2割以上を占めていることから（内田，2009），学生の不登校問題はできるかぎり早期に発見し，積極的に支援する必要がある。

#### 不登校学生の特徴とその支援

これまでの不登校学生の特徴に関する研究には，大きく分けて2つの流れがある。1つは，主に各大学の学生相談部門が実施している不登校学生に対する調査研究であり，相談担当者からみた学

生の不登校の契機や不登校を呈した学年、来談経路、転帰を検討するものである。例えば、磯部・内野・鈴木・藤巴・岡本・林・土井・黒崎・品川・酒井（2006）では、不登校の契機として精神保健上の問題、学業・研究の躓き、人間関係の問題が多いことを明らかにしている。また、安保他（2001）では、これまでの相談事例から不登校学生のアセスメントにおいて「精神的な問題およびその疑いのある学生」「アパシー状態の学生」「対人不安・対人緊張」「研究室内の人間関係」という3つの視点を提案し、アセスメントに応じた対応の例を示している。

鶴田他（2002）の調査では、不登校解消のきっかけには「進路や研究室の変更」および「教員のサポート」が多いことを明らかにしているが、不登校学生の中には学生相談部門につながらない学生も多く（小柳・森田，1994；水田・小林・石谷・安住・井出・谷口，2009），不登校学生には指導教員が手探りで対応している現状があることが複数の調査で確認されている（鶴田他，2002；水田他，2009；荒井・兒玉・大塚・岡本・石田，2012）。以上のように、学生相談部門が実施している実態調査からは、指導教員および担任教員（以下、指導教員）は不登校学生支援の要と考えられる。

その一方で、指導教員の側からは、不登校学生支援における問題点として専門的なトレーニングを受けていない大学教員が学生の不登校問題を早期に正確に判断することの困難が指摘されている（安保他，2001；水田他，2009；鶴田他，2002）。このような背景から、不登校学生を早期に発見し支援するために、支援の要であるにもかかわらず支援に不慣れな指導教員が、不登校リスクの高い学生を発見するために有用な、スクリーニング尺度を開発する必要がある。

また、もう1つの不登校学生の特徴に関する研究手法は、大学生に対し調査を行う手法であり、主に「大学に行きたくない気持ち」に関連する要因の検討が行われている。例えば、松原・宮崎・三宅（2006）では、大学生の不登校傾向を規定する心理的要因として、「大学への不本意感」「学業の躓き」「不規則な日常生活」「自分への自信のなさ」の5因子を見出している。また、鈴木・浅川・南・祁（2011）では、大学への登校回避感情には、対人関係を円滑に運ぶために役立つスキル（菊池，2004）である、社会的スキルが関連していることを明らかにしている。さらに、牧野（2001）では、「学校に行きたくない理由」の多くは大学生自身の無気力あるいは無力感といった精神的問題によるものであったと報告している。また、蔵本・穴田・棚橋・三浦（2012）では、睡眠や食事に乱れがある学生は欠席日数が多いこと、学生が休学や退学を考える理由には「学習意欲の喪失」が最も多く、「経済的困難」が次に続くことを見出している。ただし、このような大学生を対象とした研究の調査は、講義中に一斉回答・一斉回収という調査手続きを取るため、おのずと対象者が大学に登校している学生に限られ、不登校状態にある学生が調査対象者とならないという限界がある。また、学生が大学への不本意感を抱いているかどうか、睡眠や食事に乱れがあるかどうかといった問題は、指導教員からは把握しにくい問題であり、指導教員の視点にもとづいた問題の把握方法の開発が望まれる。

### 本研究の目的

本研究では、専門的なトレーニングを受けていない指導教員の視点に基づいた不登校学生に対するアセスメント方法の開発を目的とする。この目的のもと、荒井・兒玉・大塚・岡本・石田（2011）、荒井他（2012）、荒井・徳高・沖井（2012）は、1学部の大学教員を対象に不登校学生の担当経験に

関する実態調査を行うとともに、指導教員による不登校学生アセスメント尺度の作成を試みた。その結果、従来の報告（鶴田他，2002；水田他，2009）に比べて低学年時の不登校問題の報告が多く、指導経験の浅い教員でも不登校学生を担当する場合があることが明らかになった。また、教員の半数は不登校学生に対して7種類以上の援助方法を実施している一方で、自分が実施した支援の有効性を感じられない教員も半数以上いることが明らかになった。このことから、指導教員が早期に学生の不登校リスクを同定し支援につなげるための簡便な手法の開発の必要性が示唆された。また、不登校学生に対する指導教員の観点として「無気力」「適性の問題」「心理的問題」「対人スキルの問題」という4因子が見いだされたが、この4因子では学生が抱える問題が捉えられない不登校学生の一群が存在したことから、項目の再検討を行う必要性が示唆された。

そこで、本研究では、教員からみた大学生の不登校リスクを把握するための項目を作成し、さらにどのようなリスク要因が想定されるか検討することを目的とする。

## 方法

### 対象者

地方国立大学の教育学研究科・工学研究科・理学研究科所属の教員。先行研究（小柳・森田，1994；鶴田他，2002；磯部他，2006）において、不登校学生は教育学部，工学部・理学部に多いことが報告されているため、上記の研究科所属の教員に対して調査を実施した。

### 用語の定義

本調査では、鶴田他（2002）、蔵本（2011）に倣い、不登校とは「一か月以上、学生が出席すべき授業（必修科目等）に出席しない状況」とした。なお、鶴田他（2002）、小柳・森田（1994）など、多くの先行研究では、登校していない学生のうち、通学に困難を生じる経済的・家庭的問題などのない者を不登校の除外基準として設けているが、以下の3点の理由から本調査では経済的・家庭的問題による不登校の基準から除外せずに調査をおこなった。1) 学生本人が学生生活を送る上での経済的状況は本人の経済観念との関連が想定され、アルバイトに明け暮れて学業との両立が出来なくなる、もしくは生活のリズムが崩れて不登校になる学生が存在していること（蔵本他，2012）、2) 近年、大学生の経済的事由による休学者の増加が指摘されていること（小林・濱中・島，2002）。3) これらの学生に対しても、指導教員は指導や支援、そして保護者と連携を行う立場にあること。

また、「担当学生」とは、「チューターあるいは指導教員として関わった学部生」を指すこととした。

### 調査項目

**不登校を呈していない担当学生に関する情報** 担当学生の有無を尋ね、担当経験のある回答者に対し、不登校となっていない担当学生（以下、一般大学生）を一人思い浮かべてもらい、その学生の性別、居住形態、サークル加入状況、現在の学年、その学生に関わっていた当時の回答者の年齢、職階について尋ねた。

**不登校を呈した担当学生の有無** 不登校になった担当学生の有無を尋ねた。

教員からみた大学生の不登校リスク項目 30項目。先行研究において不登校との関連が指摘されている5つの要因（「社会的スキル」「学業成績および授業態度」「心身の健康状態」「不規則な日常生活」「本人が学生生活を送る上での経済状況」）それぞれについて、6項目からなるアンケートを作成した（Table 1）。

これら5つの要因の設定や項目の選定・作成に関しては先行研究や既存の尺度（e.g., 松原他（2006）の「大学生メンタルヘルス尺度」、菊池（2004）の「Kiss-18」）や大学教職員からの意見を参考に

Table 1  
教員からみた大学生の不登校リスク項目

(対人スキル)
1 他人と話していて、あまり会話が続かない
6 他人が話しているところに、気軽に参加できる
11 他人が怒っているときに、うまくなだめることができる
16 まわりの人たちとの間でトラブルが起きると、それを上手に処理できない
21 まわりの人たちが自分とは違った考えをもっていると、うまくやっていけない
26 仕事の目標を立てるのに、困難を感じやすい
(学業成績および授業態度)
2 成績は、平均、もしくは平均以上である
7 同学年の他学生に比べて修得単位数が少ない
12 同学年の他学生に比べて修得単位数が多すぎる
17 課題はきちんと提出する
22 授業中の私語が多い
27 授業を休みがちである
(心身の健康状態)
3 表情はおおむね明るい
8 大学行事への参加は積極的である
13 精神科や心療内科（もしくは学内の保健管理センター）に通っている
18 身体的不調により継続的に通院している
23 覇気がない
28 服装や髪型が急に变化した
(経済状態)
4 経済的に困窮している様子は無い
9 親から経済的援助を十分に受けている様子である
14 バイトに明け暮れている
19 清潔が保たれていない（髪がボサボサ、臭うなど）
24 華美である（不相応に華やかな格好をしている）
29 お金がないからという理由で飲み会などを断る
(不規則な日常生活)
5 眠そうである
10 標準体型から逸脱している（痩せすぎ・太りすぎ）
15 授業やゼミに遅刻することは無い
20 疲れているように見える
25 服装はいつも小ざっぱりとしている
30 肌が荒れている

注) 番号は、調査で使用した項目番号を示す

して、学生本人でないと分からない内容ではなく、教員から見て判断しやすい内容であることに留意し、大学教員2名と学生相談の経験豊富な臨床心理士1名の協力を得て決定した。将来的には、作成した尺度をスクリーニング目的で使用することを想定しているため、本調査では、想起してもらった一般大学生に対し、「あてはまらない」から「あてはまる」までの5件法にて評価するよう求めた。

**フェイス項目** 回答者の性別、現在の職階、年齢を問う質問項目。

## 手続き

質問紙の配布は、各教員が大学事務室に個別に所有しているメールボックスを利用した。回収は回収箱および返送用封筒を用意し回収した。なお、統計学的検定には IBM SPSS Statistics19 を用いた。

## 結果

### 回答者の概要

555部配布し、170部を回収した。そのうち、欠損が多いものを除外し、最終的に167人を分析対象とした（有効回答率30.1%）。回答者167名の所属の内訳は、教育学研究科が58名（34.7%）、工学研究科が60名（35.9%）、理学研究科が49名（29.3%）であり、それぞれの研究科からほぼ同数の回答が得られた。

167名の回答者のうち、担当学生を受け持った経験のある教員は140名であり、その中で不登校問題を呈した担当学生がいた教員は88名（回答者の52.7%）であり回答者の半数以上が不登校学生を担当した経験があることが分かった。

### 教員からみた大学生の不登校リスク要因の検討

最初に、担当学生を受け持った経験のある教員の回答のうち、回答に不備のあった5名を除く135名が回答した一般大学生に対する「教員からみた大学生の不登校リスク項目」について因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。因子負荷量が0.40未満の項目や2因子以上にわたって0.35以上の負荷がある項目を削除して再度因子分析を行い、その結果得られた固有値・スクリープロットおよび解釈の可能性の側面から検討を行った。最終的に最も妥当な解釈が可能となった4因子解を採用した。結果をTable 2に示した。

第I因子は「6. 他人が話しているところに気軽に参加できる」「1. 他人と話していて、会話が続かない」「3. 表情は明るい」など、項目作成時には「社会的スキル」と「心身の健康状態」の側面に關して作成された項目が多く含まれた。項目内容から、大学生活における積極的な対人交流を示していると考えられ「他者との関係」と名付けた。

第II因子は「7. 同学年の他学生に比べて修得単位数が少ない」「2. 成績は平均もしくは平均以上である」「17. 課題はきちんと提出する」など「学業成績および授業態度」に關する項目であったもの

Table2  
因子パターン行列(主因子法・プロマックス回転)

項目No.	I. 他者との交流 ( $\alpha=0.84$ )	1	2	3	4
6	他人が話しているところに、気軽に参加できる ※	0.77	0.00	0.17	0.02
1	他人と話していて、あまり会話が續かない	0.72	0.04	0.06	0.04
3	表情はおおむね明るい ※	0.72	0.20	0.14	-0.07
21	まわりの人たちが自分とは違った考えをもっていると、うまくやっていけない	0.66	-0.19	-0.24	0.01
11	他人が怒っているときに、うまくなだめることができる ※	0.56	0.13	0.12	0.05
8	大学行事への参加は積極的である ※	0.53	0.03	0.00	0.00
16	まわりの人たちとの間でトラブルが起きると、それを上手に処理できない	0.52	-0.17	-0.30	-0.11
25	服装はいつも小ざっぱりしている ※	0.50	-0.08	-0.16	-0.05
項目No.	II. 学業成績および授業態度 ( $\alpha=0.84$ )				
7	同学年の他学生に比べて修得単位数が少ない ※	0.01	0.81	-0.04	0.04
2	成績は、平均、もしくは平均以上である	0.05	0.73	0.22	0.03
17	課題はきちんと提出する	0.09	0.70	-0.17	-0.01
27	授業を休みがちである	0.03	0.54	-0.32	-0.03
15	授業やゼミに遅刻することは無い ※	-0.17	0.53	-0.14	-0.17
項目No.	III. 本人の見た目 ( $\alpha=0.72$ )				
28	服装や髪型が急に变化した	0.00	0.00	0.80	-0.11
24	華美である(不相応に華やかな格好をしている)	0.14	0.00	0.68	0.05
30	肌が荒れている	-0.19	-0.08	0.54	-0.07
項目No.	IV. 経済的問題 ( $\alpha=0.58$ )				
9	親から経済的援助を十分に受けている様子である ※	-0.05	0.06	-0.12	0.87
4	経済的に困窮している様子は無い ※	-0.01	-0.08	-0.07	0.48
1	バイトに明け暮れている	0.06	-0.06	0.23	0.42

※ 逆転項目(処理済み)

が多いことから因子名を「学業成績および授業態度」と名づけた。

第Ⅲ因子は「28. 服装や髪型が急に变化した」「24. 華美である」「30. 肌が荒れている」など、学生本人の外見に関する項目から構成されていたことから「本人の見た目」と名づけた。

第Ⅳ因子は「9. 親からの経済的援助を十分受けている様子である」「4. 経済的に困窮している様子は無い」「14. バイトに明け暮れている」3項目から構成された。いずれも元々「本人が学生生活を送る上での経済的状況」の項目であったことから、「経済的問題」と名づけた。

また、クロンバックの $\alpha$ 係数は第Ⅰ因子で $\alpha=0.84$ 、第Ⅱ因子で $\alpha=0.84$ 、第Ⅲ因子で $\alpha=0.72$ 、第Ⅳ因子で $\alpha=0.58$ であり、第Ⅳ因子以外は十分満足できる値が得られた。

上記の4因子を「教員からみた大学生の不登校リスク要因」とした。

次に、不登校学生の担当経験による大学生の特徴の把握方法の違いを検討するために、不登校学生の担当経験の有無を独立変数、一般大学生に対する「教員からみた大学生の不登校リスク要因」の得点を従属変数とした $t$ 検定を行ったところ、「他者との関係」( $t(135)=-1.62, ns$ )、「学業成績および授業態度」( $t(135)=.38, ns$ )、「本人の見た目」( $t(135)=.06, ns$ )、「経済的問題」( $t(135)=.34, ns$ ) すべてに有意差は認められなかった。以上のことから、「教員からみた大学生の不登校リスク要因」は、不登校学生の担当経験に関わらず、教員が大学生の特徴を把握するために使用可能であることが確認された。

## 考察

大学生の不登校に関する研究には、主に学生相談分野で行われている研究と、一般大学生を対象にした調査研究に大別されるが、その知見は、専門家向けであったり、対象の限界があったりするなど、不登校学生の支援の要である指導教員が不登校学生の支援にあたって参考とするには限界があった。そこで、本研究では先行研究や現職の大学教職員、および学生相談の経験豊富な臨床心理士の意見をもとに、教員からみた大学生の不登校リスク要因を5つ挙げ、各要因6つの項目を作成し、その項目の検討を行った。

その結果、教員からみた大学生の不登校リスク要因として4因子19項目が抽出された。

第Ⅰ因子は、社会的スキルの測定を目的に作成された項目が多く含まれ、大学における他者との関係、ふるまいに関する項目から構成された。荒井他（2011）において、教員が不登校学生を見る観点の1つとして「対人スキルの問題」があることが確認されており、教員が学生の不登校リスクを把握する上で、重要であると考えられる。また、鶴田他（2002）は、学生相談に来談した不登校学生の不登校のきっかけとして多いのは「孤立・対人トラブル」であることを報告しており、また、磯部他（2006）も「孤立・対人関係」といった人間関係の問題を背景に持つケースが多いと報告しており、本因子は、教員が大学生の不登校リスクを見極める際に重要な因子であると考えられる。

第Ⅱ因子は、学業成績および授業態度に関する項目から構成された。学業成績低下および授業態度悪化の背景としては、不本意入学、受験勉強の反動としての燃え尽き、講義への失望、講義の理解困難、卒論・修論への自信喪失などがあり、これらが続くことで学校から足が遠のき、講義・研究への意欲・興味・理解が一層低下し、不登校が継続するという悪循環が生じると言われている（安保他，2001）。また、不登校に関連する要因や不登校の契機として、学業の躓き（磯部他，2006；松原他，2006）や単位未修得（蔵本，2011）は多くの研究で指摘されている。本因子で測定している学業成績および授業態度の悪化は、学力の問題だけでなく、不登校と関連の深い学業に関する幅広い問題を測定しており、本因子も教員が大学生の不登校リスクを把握する上で重要な因子であると言える。加えて、講義やゼミで学生に接する機会が多い指導教員にとって、大学生の不登校リスクを把握するために特別な働きかけを必要としない本因子は、使用しやすさの観点からも有用性が高いと考えられる。

第Ⅲ因子は、項目作成時「不規則な日常生活」「経済状態」「心身の健康状態」を表す項目内容と考えられた項目から構成された。大学生を対象とした調査で、生活習慣の乱れと欠席との関連が報告されていることから（松原他，2006；蔵本他，2012）、不規則な生活によって表面に現れやすい肌荒れ、眠そうな様子、遅刻といった外見上の特徴及び行動に関する内容の項目を作成したが、生活習慣の乱れに関連した項目は「肌荒れ」のみが採用された。また、近年増加が指摘されている大学生の経済的事由による休学者問題（小林他，2002）を想定して作成した項目である「華美である」も後述する経済的問題の因子には取り込まれず、本因子に取り込まれた。さらに、心身の健康状態の項目として作成した「服装や髪型の急な変化」も本因子に取り込まれ、本因子は、教員から見た

本人の見た目に関連する項目で構成された。今回の研究では、本因子が測定しようとしている内容が、先行研究における不登校リスク要因の何に当たるのか明確にならなかったが、服装が本人の持つ規範意識と関連しているという報告もあり（山岡・清水，2011），今後，教員にとって気になる見た目が，学生の適応にどう関係しているのかをさらに検討する必要がある。また，指導教員および学生の性別や年齢により，服装や肌の評価基準は異なっている可能性も考えられるため，今後調査を行う際には，教員や学生の属性を踏まえた分析を行い，どのような対象に適用可能か確認する必要があると考えられる。

第IV因子は，学生本人が学生生活を送る上での経済状況を示す内容として作成された6項目のうち3項目から構成された。今回の調査では，試みに不登校の除外基準として経済的問題を設けず，不登校に関連する要因として項目を設定し本因子が抽出されたが，十分な内的整合性が得られなかった。経済的問題による不登校は学費とも関連する可能性もあり，今後は，本因子を用いた調査を行い，その有用性の検討を行うとともに，学費が国立大学に比べ高い私立大学における経済的事由による学生の不登校問題に関する聞き取り調査を行い，経済的問題を不登校問題に組み入れるべきか意見を募り，本因子について再検討する必要がある。

以上のように，今回作成された「教員から見た大学生の不登校リスク要因」は，経済的問題を除き，内的整合性も満足できる値であり，また，これまでに得られている不登校学生に関する知見を支持する内容であった。今後は，今回作成した「教員から見た大学生の不登校リスク要因」を用いて，大学生生活4年間の中で不登校を呈した学生と不登校を呈さず卒業した学生の特徴の違いを検討し，不登校リスクを評価する要因としての有用性を検討する必要がある。また，本研究で見出された要因と不登校リスクとの関連を縦断的観察研究により検討する必要がある。

## 引用文献

- 荒井佐和子・兒玉憲一・大塚泰正・岡本祐子・石田弓（2012）．大学生が求める大学教員からの心理的支援 —不登校学生に対する大学教員の支援の現状，広島大学大学院教育学研究科共同研究プロジェクト報告書，**10**，143-154.
- 荒井佐和子・徳高平蔵・沖井明（2012）．大学教員の不登校学生に対する視点の分類—自己組織化マップを用いた試み— 第13回自己組織化マップ研究会2012講演論文集，101-103.
- 荒井佐和子・兒玉憲一・大塚泰正・岡本祐子・石田弓（2011）．不登校大学生に対する大学教員の視点と支援，広島大学心理学研究，**11**，339-343.
- 安保英勇・吉武清實・菊池武剋（2001）．東北大学における学生の不登校・不適応 東北大学学生相談所紀要，**27**，1-9.
- 磯部典子・内野悌司・鈴木康之・藤巴正和・岡本百合・林マサ子・土井 由・黒崎充勇・品川由佳・酒井祥子（2006）．学生相談から見た不登校の現状 総合保健科学（広島大学保健管理センター研究論文集），**22**，91-98.
- 菊池章夫（2004）．Kiss-18 ノート 岩手県立大学社会福祉学部紀要，**6**（2），41-51.



- 小林雅之・濱中義隆・島 一則 (2002). 国立大学における経済的事由による休学者に関する実証的研究— 国立 A 大学を事例として— 日本教育社会学会大会発表要旨集録, **54**, 46-47.
- 小柳晴生・森田敏郎 (1994). 休学者および出席不良学生のスクリーニングおよび相談システムの研究 香川大学保健管理センター1993 年度教育研究特別経費研究報告書
- 蔵本信比古 (2011). 大学生の不登校と単位取得との関連 北海道情報大学紀要, **23**(1), 37-44.
- 蔵本信比古・穴田有一・棚橋二朗・三浦 洋 (2012). 大学生の欠席過多に関連する諸要因 北海道情報大学紀要, **23**(2), 137-156.
- 牧野幸志 (2001). 大学生の不登校に関する基礎的研究 高松大学紀要, **36**, 79-91.
- 松原達哉・宮崎圭子・三宅拓郎 (2006). 大学生のメンタルヘルス尺度の作成と不登校傾向を規定する要因 立正大学心理学研究所紀要, **4**, 1-12.
- 水田一郎・小林哲郎・石谷真一・安住伸子・井出草平・谷口由利子 (2009). 「大学生に見出されるひきこもりの精神医学的な実態把握と援助に関する研究」厚生労働省『こころの健康科学研究事業「思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究」平成 20 年度分担研究報告書
- 野本ひさ・玉井洋明・井戸 興・上西喜晴・川尻美菜・安井万理・萩森真由美・栗林照子・岡本厚美・田中優子 (2012). 「こころと健康」の出席点及び電話連絡による不登校予防の取り組み 大学教育実践ジャーナル, **10**, 77-80.
- 鈴木真波・浅川潔司・南 雅則・祁 秋夢 (2011) 大学生の友人関係に関する社会的スキルと登校回避感情の関係に関する研究 学校教育学研究, **23**, 27-33.
- 鶴田和美・小川豊昭・杉村和美・山口智子・赤堀薫子・船津静代・鈴木國文 (2002). 名古屋大学における不登校の現状と対応 名古屋大学学生相談総合センター紀要, **2**, 2-15.
- 内田千代子 (2009). 大学における休・退学, 留年学生に関する調査 第 28 報
- 山岡重行・清水 裕 (2011). 女子大生の服装に関する規範意識 日本教育心理学会第 53 回総会発表論文集, 137.
- 渡辺 厚 (2010). 不登校問題への対応 *CAMPUS HEALTH*, **47**, 70-72.